

「スワンの恋」のトルコ帽の若い男について

前田 美樹

はじめに

御存じのとおり、『失われた時を求めて』*À la recherche du temps perdu* の冒頭は、有名な *Longtemps, je me suis couché de bonne heure.*¹⁾ 「長いあいだ、私は夜早く床に就くのだった。」で始まる長い就寝の描写で始まります。その冒頭ですでに、「眠り」や「夢」という主題はすでに重要な要素として作品に描かれ、多くの読者、多くの研究者を魅了してきました。そして作中でプルースト自身も、登場人物、とりわけ語り手に「夢」に関するさまざまな考察をさせ、また作品の構造においても夢の描写の配置を綿密に練り、配置させることにより、この作品に一種の深みを与えようと努力したと言われています。本稿では、『スワン家の方へ』*Du côté de chez Swann* の「スワンの恋」*Un amour de Swann* に描かれるスワンが見た夢に登場する「トルコ帽の若い男」について考察したいと思います。この夢については、すでにいくつかの研究がなされています²⁾。

本稿では、フロイトを代表とする精神分析的方法を用いて「プルーストと夢」について考察するのが目的というよりも、「トルコ帽の若い男」に附随する不思議な魅力がどこからくるのか、ということを解明することを目的としています。それは数年前に初めて『失われた時を求めて』を読んだ時から、「スワンの恋」のラストに描かれる「スワンの夢」に登場する「トルコ帽の若い男」に何かしら惹かれるところがあり、「トルコ帽の若い男」とはいったい何者なのか？という素朴な疑問を抱いたことに由来しています。

この「スワンの恋」における「トルコ帽の若い男」の夢は、先に示した作品の冒頭での就寝の場面から始まる「コンブレー」*Combray* (この「コンブレー」は語り手がコンブレーを思い出して過ごしたひと晩の後の目覚めによって閉じられます)と、「スワンの恋」をはさんでその後につづく「土地の名・名」*Noms de pays: le nom* において再び語られる不眠にまつわる

描写に挟まれているという構造を持っていて、その構成はまるで眠りと眠りの間に語られる「スワンの恋」という章を、いっそう引き立たせるという構造を持っているというふうには思われてしかたないのですが、この夢の中に浮遊したようなこの構造の中に配置されている「スワンの恋」、そして「スワンの夢」に描かれる「トルコ帽の若い男」は、ひととき存在感を放っています。

1. スワンの夢

『失われた時を求めて』の『スワン家の方へ』の第二部「スワンの恋」の後半でスワンは、今ではもう自分のところから遠ざかろうとしている恋人オデットがヴェルデュラン夫人のサロンに出入りしているフォルシュヴィル、ないしオデットの過去に関係するその他不特定多数の男に対し、次第に嫉妬を深めてゆき、彼の恋はもはや「手術不能」の状態に陥ります。恋の始まりの部分では、スワンは愛する側というよりも、愛される側で、当初スワンに対して積極的であったオデットは、スワンと恋仲になったとたん「釣った魚に餌はやらぬ」とばかり、次第にスワンに対して冷たくなってゆきます。それに加え、スワンとオデットが出入りし、スワンが愛の巣とみなしていたサロンの女主人、ヴェルデュラン夫人にも嫌われたスワンは、二人の逢い引きの時間を邪魔されるようになり、またヴェルデュラン夫人は、オデットにスワンという相手がいるのを知っていながら、オデットとフォルシュヴィルをとりもとうとしたりと、サロンでの居場所をフォルシュヴィルに奪われ、サロンでの地位を失ったスワンは、次第にそのサロンから疎外されてゆきます。またヴェルデュラン夫人が、サロンの仲間たちと、エジプトやパイロイトに長い旅行を計画したために、スワンがオデットと、サロン以外で会うという機会も次第に減ってゆき、スワンは恋に対する苦悩や嫉妬のために一時は自殺することまで考えます。

そして、オデットとの恋のためにしばらく社交から

遠ざかっていたスワンが久しぶりに出かけて行ったサン＝トゥーヴェルト邸での夜会において、恋が始まったところに二人の愛をもちたてたヴァントウイユの小楽節を再び耳にし、そして楽しかったところがすでに過去のことであるということはこの小楽節によって悟ったスワンが自らを客観視することができるようになるというこの場面は、この恋が間もなく終わりを告げるであろうことをわれわれに示すのですが、そこで「スワンの恋」の最後に描かれる、スワンがオデットとの恋の終わりをようやく受け入れ、それを決定的にする、「トルコ帽の若い男」が登場するあの夢を見る場面が描かれます。

それは彼が眠っているとき、ある夢の黄昏のなかでのことだった。彼は、ヴェルデュラン夫人、コタール医師、だれだか分からないトルコ帽の若い男、画家、オデット、ナポレオン三世、それから私の祖父などと一緒に散歩をしていた…³

というように、夢の中でスワンは“ヴェルデュラン夫人”，“コタール医師”，“だれだか分からないトルコ帽の若い男”，“画家”，“オデット”，“ナポレオン三世”，そして“語り手の祖父”と共に、海に沿って切り立った崖の上を散歩していました。スワンは頬に冷たいしぶきがかかるのを感じ、オデットにそれを拭きなさい、と言われるのですが、彼にはどうしてもそのしぶきを拭くことができません。顔にしぶきをあびたまま、また寝巻き姿のままのスワンは、ばつの悪さを感じるのですが、スワンはその姿をヴェルデュラン夫人に目撃され、彼女は驚きの顔で、彼のことをじっと見つめるのですが、やがて夫人の顔が崩れて、鼻が伸び、立派な髭の生えるのを彼は見ます。ついでスワンが振り向いてオデットの方を眺めると、彼女の頬は蒼ざめて、小さな赤い斑点が浮かんでおり、顔はやつれて隈ができていたが、それでも彼を見つめるその目は愛情に満ち、まるで二つの涙の粒のように今しも彼の上にこぼれ落ちんばかりで、スワンはそんなオデットの顔を見ると、彼は自分がオデットを本当に愛していると感じ、すぐにも彼女を連れて帰りたいと思います。しかし突然オデットは皆に別れをつけ、どこかへ行ってしまう。スワンは彼女のあとを追って行きかけたにもかかわらず、彼女の方へは顔も向けずにはいません。そして画家はスワンに、彼女の帰った直後にナポレオン三世の姿が見えなくなったことを教えます。

「…あの連中は崖の下で落ちあったにちがいない。…オデットはあいつの愛人なのさ」見知らぬ若い男は泣きはじめた。スワンはこの男を慰めようとした。…彼は若い男の涙を拭い、楽になるようにトルコ帽をとってやった。「…どうしてこんなことを悲しがるんです？…」こんなふうにスワンは、自分に向かって話しかけていた。⁴

というように、オデットとナポレオン三世の逢引きを知ったトルコ帽の若い男は泣きはじめるのですが、スワンは見知らぬトルコ帽の若い男の涙をぬぐってやり、トルコ帽をとってやりして、慰めてあげようとするのですが、それがほかならぬ自分自身であったことにきづきます。そして火事の挿話が入り、そうこうするうちに、彼が眼前に見ていた光景は消え去り、呼び鈴の音で彼は目覚めます。以上がスワンの夢のおおまかなあらすじです。この描写から読み取れるのは、スワンは、夢の中でもヴェルデュラン夫人のグループから疎外され、そしてオデットに対して、嫉妬で身動きが取れなくなっていて、スワン自身の今の状況が、さまざまな断片となってこの夢に反映されているということです。「夫人の顔が崩れて、鼻が伸び、とうとう立派な髭の生えるのを彼は見た」というヴェルデュラン夫人がまるで男性に変身してしまうかのような表現からは、スワンがものすごい驚きを覚えたという、「ブローニューの森でヴェルデュラン夫人がオデットにしつこく言寄った」という事件をわれわれに連想させますし、「彼女の頬は蒼ざめて、小さな赤い斑点が浮かんでおり、顔はやつれて隈ができていたが、それでも彼を見つめるその目は愛情に満ち、まるで二つの涙の粒のように今しも彼の上にこぼれ落ちんばかりである」という記述はまさに、スワンがオデットに始めて出会った時に抱いた印象を示しています。

このように、この夢には、スワンがオデットとの恋で経験した、さまざまな要素が暗示されています。そしてこの夢に関して最も注目したいのは、この夢の登場人物です。

2. もう一人のスワン

先に示したように、スワンは、ヴェルデュラン夫人のサロンに出入りしている常連や、その恋にかかわる人物をこの夢に登場させているのですが、*un jeune homme en fez qu'il ne pouvait identifier* 「だれだか分からないトルコ帽の若い男」、の存在は、この夢の登場

人物の中でひとときわ注目を引きまします。やがて *Ainsi Swann se parlait-il à lui-même* 「こんなふうにはスワンは、自分に向かって話しかけていた」というように、この「トルコ帽の若い男」は実はスワン自身であったことが示されるのですが、それは「ある種の小説家のように、彼は自分の人格を二人の人物に分ち与えていた」というように、スワンは、眠っている本人の意識である「夢を見ている人物」と、彼が目の前に見ているこの「トルコ帽の若い男」のどちらもが自分自身であると認識するに至ります。

今問題になっている夢の場面の以前にも、スワンと「もう一人のスワン」の存在が示される場面が出てきます。彼が「もう一人の自分」を意識しはじめるのは、スワンがヴェルデュラン夫人のサロン帰りのオデットを、パリ中をかけずりまわって捜した夜からでした。

スワンは否応なしに認めざるをえなかった、プレヴォの店に自分を連れていくこの同じ馬車のなかで、自分はもはや今までの自分と同じではなく、また自分一人だけでもない、自分とともに新たな存在がそこにいて、自分にぴったりとはりつき、自分と一体になり、彼はその存在を振り払うこともおそらくできないだろうし、今後まるで主人が病気に対してそうするように、この存在とよろしく折あっていかねばならないだろう、と。にもかかわらず、一人の新しい人物がこのように自分につけ加わったことを、ついでしたが感じて以来というもの、彼には人生がこれまで以上に興味深いものに思われた。⁵⁾

つまり、初めてオデットに対してものすごい執着を感じたあの晩からです。それはスワンにとって事実上、恋の始まりを意味する夜で、その夜にスワンは「一人の新しい人物がこのように自分につけ加わった」ことを認識するのです。事実オデットに恋をしたスワンは、他人の目には「別人」にうつります。

このように、スワンがオデットに恋をして以来、スワンは自分自身の中に「もう一人の自分」を作り上げてゆくのです。それはまさに、スワンの恋が作り上げた人物でした。次に挙げるのは、スワンが過ぎ去ったオデットとの良かった頃の思い出を回想するシーンです。

かれはまったくあきらめきっていたときに、彷徨

する人影にまじった彼女にばったりと出会ったあの晩、つぎつぎと消されていったイタリアン大通りのガス灯のことを思い出した。あの日のことはほとんど超自然の出来事のように思われ、そして事実あの晩は…まさしく不思議な別世界、その扉がふたたび閉ざされてしまえばもう二度とそこに帰ってくることはできない別世界のことに属していたのである。そしてスワンは、追体験されたこの幸福の前にじっと動こうともしない一人の不幸な男の姿を認め、それが何者であるのかすぐには分からなかったので、すっかり哀れをもよおし、そのために自分が涙をいっばいためているのを見られないようにと、目を伏せねばならなかった。それは彼自身の姿だったのである。⁶⁾

この場面は、「スワンの恋」のラストに描かれる夢を予感させるライトモチーフのようなものとなっています。それは「スワンの恋」にときどきあらわれるワグナーへの言及を思わせます。

そしてもう一つが、オデットが旅行でパリに不在のときに、スワンも一度パリを離れてみようと考えているのですが、オデットが不在とはいえ、パリを離れるというそんな残酷な計画はできないと感じていたスワンが、眠っている間に彼の心に旅行したいという気持ちが蘇り、それが夢の中で実現されるという箇所です。

ある日彼は、自分が一年間の予定で出かける夢を見た。列車の昇降口からスワンは身を乗り出して、プラットフォームの上で泣きながら自分に別れを告げている青年に、一緒に出発しようと説得していた。汽車ががたりと動き、不安で彼は目をさました。⁷⁾

このようにして、オデットとの関係を決定的にした夜に「もう一人の自分」つまり、自分の中に存在する他者を認識したスワンなのですが、下線部で示した「一人の不幸な男」や「泣きながら自分に別れを告げている青年」、そしてこの夢にでてくる「トルコ帽の若い男」は、スワンがオデットとの恋愛に行き詰まりを覚えて以来、しばしば登場するのです。

3. トルコ帽の若い男

しかしスワンの「分身」は「スワンの恋」の最終部で描かれる夢⁸⁾で、なぜ「トルコ帽の若い男」*un jeune*

homme en fez と表されることになったのでしょうか？単なる「若い男」ではなく、「トルコ帽」をかぶっているのには、何か意味が隠されているのでしょうか。

ブルーストは『失われた時を求めて』において、当時の時代背景を思い起こさせる歴史的事象について、たびたび言及します。とはいえ、それはサロンでのちょっとした会話であったり、土地の名前であったり、登場人物たちのちょっとした行動であったりと、いくつもの破片を作中にちりばめさせています。「スワンの恋」のラストを飾る重要な夢の主人公にブルーストが与えた「トルコ帽の男」という人格はそんな一例の一つではないかと考えます。ブルーストはスワンの分身にトルコ帽をかぶせることにより暗示しようとしたのは何だったのでしょうか。

まず、「トルコ帽」を表す「fez」フェズを辞典で引いてみると、

fez 円錐台形のフェルト製の帽子。黒色または暗赤色で、房飾り付き。1820年代、オスマン帝国が陸軍の制帽に定めた。今はイスラム教徒が着用していて、名前の由来はモロッコの都市 fez の名から

とあります。

ブルーストは恋に行き詰まったスワンの分身に「トルコ帽」をかぶせることによって広い意味での“オリエント”を暗示させることを意図したのではないかと考えられます。その意図はもう一人の謎の登場人物、「ナポレオン三世」Napoléon III によってより明確になります。

この夢の中の「ナポレオン三世」というのは、「一種の曖昧な連想から、ついでフォルシュヴィル男爵のいつもの顔つきにいくぶん修正を加えたために、さらに首にさげたレジオン・ドヌール大綬章のおかげで、スワンがこの男爵につけてしまった名前だった。」というように、ここではスワンの恋敵である「フォルシュヴィル」の変形であると説明されます。スワンの恋敵で、恋において彼よりももはや優位な立場にいる「フォルシュヴィル」が、単に似ているからという理由だけで、「ナポレオン三世」に置き換えられたのでしょうか。そうではなくて、ここにはブルーストが隠したからくりがあるように考えられます。

「ナポレオン三世」とは、一般的に、歴史上の人物で、ナポレオン一世の甥で、52年に帝位につき、第

二帝政を開き、その後の二十年間、フランスの政治経済、文化は花々しく発展します。しかし、1861年のメキシコ遠征の失敗につづき、70年の普仏戦争で敗北し捕虜になって退位します。

ナポレオン三世は植民地政策を積極的に行った人物でした。経済が発展すれば、新たな市場が必要となり、当時のヨーロッパ諸国はわれさきにと、アフリカ、アジアで植民地獲得競争をおこなっていました。当時、ヨーロッパの視線から見た「オリエント」はエジプトからシリアを越えて、ユーラシア大陸の東端にまでとみなされていました。そしてフランスも、トルコ、アフリカに加え、インドネシア、中国、日本にもその鋒先を向けます。そして、スワンが生きたと予測されるちょうど1850年代から1900年の期間は、フランスの植民地拡張事業がもっとも積極的に進められた時期でした。そのことは作中でフォルシュヴィルやオデットが聖霊降臨節の休みにエジプトへでかけた¹⁰り、ヴェルデュラン夫人の一行が、アルジェからチュニスに行き、ついでイタリアへ、ギリシャへ、コンスタンチノーブルへ、小アジアへと大旅行すること¹⁰などでも示されるとおり、一般の人びとにとっても植民地化によって「未開の地」であった「オリエント」がより身近なものになり、関心はその方向へ向けられていたことをあらわしています。そして1870年代が植民地化の決定的な転換期にあたり、その時期は植民地政策の「拡張期」とみなされました。

植民地の拡張とは、文化的背景や、社会組織を異にする「他者」を効果的に支配するために、「他者」に対して、自分たちの文化と制度を強制してゆく行為にほかなりません。当時ヨーロッパの強国になりつつあったフランスが、植民地拡張事業に基づいて、北アフリカやオリエントを徐々に手に入れて行く。そのとき、北アフリカ諸国は「他者」として位置付けられる。つまり「文明」と「未開」、「文明」と「野蛮」の対立、「ヨーロッパ文明」と「オリエント」の対立に置き換えられたスワン＝「トルコ帽の若い男」＝「オリエント」という「他者」とフォルシュヴィル＝「ナポレオン三世」＝「ヨーロッパ文明からの支配者」という隠れた構図によって、このような社会情勢とオデットをめぐるスワンとフォルシュヴィルの対立をより印象的に暗示しようとしたブルーストの意図が隠されているのではないのでしょうか。

また、「スワンの恋」において「トルコ」への言及は、スワンがオデットの部屋を訪れたときに、一度だけ現れます。

その壁からは^{オリエント}東方の布、トルコの数珠、絹の細紐でつるされた大きな日本の提灯などが下がっていた¹¹⁾

と、二人の恋の初期にスワンがオデットの部屋を訪れたとき、オデットは当時流行していたオリエント趣味で部屋を飾っていました。この部屋の描写はのちにオデットがボアのアカシア並木を散歩しているときに、娼婦時代のかつての男のひとりからも「風変わりな小さな邸宅に支那風の調度を整えて住んでいた」ことを思い出されることからわかるように、オデットと恋をした男たちは、オデットに「オリエント」の印象を与えているのです。このように、この部屋の描写はオデットと「オリエント」を結び付けるのに重要な印象を与え、またスワンがオデットの住む通り「ラ・ペルーズ」を植民地開拓時代の「デュモン・デュルヴィルが遺骨を持ち帰った例の海の旅行者、あのラ・ペルーズ」¹²⁾を連想することからも伺えるように、スワンとオデットの恋はしばしば植民地政策を思わせる言及によって飾られているのです。

さらにオデットとの恋に悩まされていたときにスワンが訪れたサン＝トゥーヴェルト夫人の夜会においても、フロベルヴィル将軍との会話において彼が話した「野蛮人どもに虐殺される」という言葉に「心を貫いて激しい痛みを覚える」¹³⁾のですが、このことも、オデットとスワンの恋の末期の状態が当時の社会情勢に例えられ描写されていることを裏付けるのに、非常に示唆的であるのではないのでしょうか。

ヴェルデュラン夫人から「気のおけない人」の烙印を押されたスワンは、彼女のサロンにおいて、もはや「他者」でしかありませんでした。そんな「他者」としての「もう一人のスワン」を夢の中であれ「トルコ帽の男」とすることで、ヴェルデュラン夫人のサロンから疎外され、オデットからも引き離されたスワンの「他者性」を当時の「植民地政策」やオリエントに対する関心になぞらえて、見事に表現しているのではないのでしょうか。

む す び

このように、スワンは「コンプレー」において登場して以来、一方で「息子のスワン」であったり、また一方では「ジョッキー・クラブの最もエレガントなメンバーの一人、パリ伯爵や英国皇太子のお気に入り、フォーブール・サン＝ジェルマンの上流階級で最もも

てはやされている男の一人」であったりと数々の顔を持つ登場人物として描かれてきました。スワンは意図的に様々な自分を使い分けながら、それぞれの場所でそれぞれの自分を演じてきたといえるでしょう。また、サン＝トゥーヴェルト夫人の夜会で久々にヴァントゥイユの小楽節を聞いた時、スワンは自分が「分裂」するという体験もします。

いったい、あの目に見えない悲しげな存在、その嘆きをあとからピアノがやさしく繰り返してくれたこの存在、それは一羽の小鳥なのか？まだ不完全な小楽節の魂なのか？妖精であろうか？…スワンには分かっていた、小楽節がいま一度語りかけようとしているのだ。そしてスワンは完全に分裂していたので、もうすぐ小楽節の前に出られるのだと考えたとき、突然、美しい詩句か悲しい報せによって私たちのうちに惹き起こされるあの鳴咽が、ぐっと胸にこみあげてきた¹⁴⁾

と。スワンとオデットの恋の伴奏曲であるヴァントゥイユの小楽節を聞いたときにも「分裂」してゆくスワンは、オデットとの恋の苦悩を通してますます分裂してゆきました。恋の行き詰まりや嫉妬は、やがてスワン自身の生み出した彼の中の「他者」の分裂、増殖を制御不能にしたばかりか、彼の持ち合わせている「血」の側面も浮かび上がらせてしまうのです。

オデットに対する嫉妬からの解放を意味するラストの夢に現れるスワンの恋が最終的に生み出した「分身」である「トルコ帽の若い男」、またその隠された「他者性」についてみてきたのですが、スワンがこの「トルコ帽の若い男」の夢を見、すでにオデットにとって「他者」でしかなくなってしまった自分自身を認識し、その事実を受け入れることでオデットとの別れを決意するということは、その後のスワンは結局オデットと結婚するということを考えると、この決意は全く皮肉なものでした。

結局この夢に出てきた「トルコ帽の若い男」が暗示した、「他者」として疎外された人生を、皮肉にもスワンは死ぬまで、そして死んでからも生きることとなります。フーコーが『夢と実存』において、「夢の本質的な点は、夢が過去に関してよみがえらせることの中にそれほどあるわけではなく、むしろ夢が未来について告げることの中にあるのだ。…夢は解放の瞬間を先取りしているのだ。それゆえ夢は、外傷を受けた過去の強迫的反復であるというよりはむしろ、生活

史の予兆となっている』⁵と述べているのは大変興味深いことです。そしてプルーストもこの夢の描写の後に、

後に私たちの心を惹く運命にある人びとが、私たちの人生のなかにはじめて姿を見せる瞬間は、あとから見れば私たちの目に一種の予告、一種の前兆といった価値を帯びるものである。¹⁶

と述べています。とすれば、「トルコ帽の若い男」は、後のスワンをわれわれに予感させる、とても不吉な象徴的存在といえるのではないのでしょうか。

そして最後に1888年当時、十七歳だったプルーストがコンドルセ校の哲学教授であったアルフォンス・ダリュに宛てた手紙に注目したいのですが、手紙の中でプルーストは自我の分裂に対する悩みを教授に打ち明けます。青年期のプルーストにとって自我の「分裂」というテーマが彼自身にとって重要な問題であり悩みであったことがこの手紙から伺えます。このような自己の体験が、この「トルコ帽の若い男」という人格を生み出したことも忘れてはならないでしょう。

註

1) *RTP*, I, p. 3.

テキストは、Marcel Proust, *À la recherche du temps perdu*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 4 vol., 1987-1989. を使用した。また原文でのページ番号は作品名を *RTP*, I, II, III, IV, と略記したあとにページ番号を入れる。引用は集英社版, 1996-2001, 鈴木道彦訳を用いた。なお引用文中の傍線はすべて筆者による強調である。

2) Jean Bellemin-Noël, «*Psychanalyser*» *le rêve de Swann?*, Poétique, seuil, 1971. など。

3) *RTP*, I, p. 372.

4) *Ibid.*, p. 373.

5) *Ibid.*, p. 225.

6) *RTP*, I, p. 341.

7) *Ibid.*, p. 348.

8) 『失われた時を求めて』以前の作品、『ジャン・サン

トゥイユ』において描かれる、この夢の前身といわれている「夢のなかでの嫉妬の目覚め *Un rêve déjà réveillait la jalousie*」 pp. 282-285. (*Jean Santeuil*, pp. 819-822.) の章では、主人公ジャンの分身としての人物は現れませんが、そのかわりに「魂」があらわれて、これらの「分身」の前身のであるかのように描かれています。

9) *Ibid.*, p. 308.

10) *Ibid.*, p. 341.

11) *RTP*, I, p. 216.

12) *Ibid.*, pp. 287-288.

13) *Ibid.*, p. 338.

14) *Ibid.*, p. 302.

15) 『夢と実存』, pp. 71-72, ミッシェル・フーコー／ピンスワンガー著, 荻野恒一, 中村 昇, 小須田健共訳, みすず書房, 1992.

16) *RTP*, I, p. 352.

参考文献

〈テキスト〉

Marcel Proust: *À la recherche du temps perdu I, II, III, IV*, Édition Publiée sous la direction de Jean-Yves Tadié, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1987-1989.

マルセル・プルースト著, 鈴木道彦訳: 『失われた時を求めて』, 1-13巻, 集英社, 1996-2001.

マルセル・プルースト著, プルースト全集13, ジャン・サントゥイユⅢ, 保莉瑞穂訳, 筑摩書房, 1985.

マルセル・プルースト著, プルースト全集16, 書簡I, 岩崎 力, 牛場暁夫, 後藤辰男, 佐々木涼子, 徳田陽彦, 保莉瑞穂, 吉川一義, 吉田 城訳, 筑摩書房, 1989.

〈参考文献〉

プルースト・夢の方法, 保莉瑞穂著, 筑摩書房, 1997.

表象の植民地帝国 近代フランスと人文諸科学, 竹沢尚一郎著, 世界思想社, 2001.

フランス史 (新版), 井上幸治編, 山川出版社, 1979.

ヨーロッパ文明批判序説 植民地・共和国・オリエンタリズム, 工藤庸子著, 東京大学出版会, 2003.

夢と実存, ミッシェル・フーコー／ピンスワンガー著, 荻野恒一／中村 昇／小須田健共訳, みすず書房, 1992.

〈雑誌〉

«*Psychanalyser*» *le rêve de Swann?*, Jean Bellemin-Noël, Poétique, seuil, 1971, 8号.